

心理学におけるパラダイムシフト

名古屋女子大学文学部教授・京都大学名誉教授

坂野 登 (さかの のぼる)

パブロフの条件反射のパラダイムに魅せられ、理学部から転学部し心理学を学び始めて半世紀あまりたつ。その間ずっと私のこころの片隅を占めていたのは、私自身が、そして他の心理学者たちがどのようなパラダイムに則り研究をしているのかということだった。科学史家トーマス・クーンによると、パラダイムとは“A paradigm is what members of a scientific community, and they alone, share.”ということになる。

クーンの定義によるパラダイムが、心理学において劇的に変化(シフト)した例として、古くは、パブロフ学説の悪しき転用としてのアメリカ行動主義心理学の流行があり、最近では、コンピュータの発展に伴う情報科学の影響を強く受けた、認知心理学の急速な台頭が考えられる。認知行動療法を唱える丹野義彦氏は、欧米の心理学では、精神分析療法から認知行動療法への移行、エビデンスに基づく実践の定着、職業としての科学的臨床心理学の確立の三つの大きなパラダイムシフトが起こりつつあるという。しかしこれは臨床心理学の領域での、しかも拡大解釈されたパラダイムシフトの範疇にはいるものといっておくべきだろう。

私はこれから心理学で起きるのは、「認知と感情の統一的理解へのパラダイムシフト」ではないかと思う。それは脳研究の最近の成果を取り入れ、さらに人の行動を進化論的にとらえようとする立場から可能となるだろう。それは、大脳半球の特殊化が言語機能と結びついて発生した、人に特有なものだということ、これまで多くの学者によって信じられてきたパラダイムから、環境に対する適応的行動における行動的、神経学的水準での証拠から、この特殊化は脊椎動物ですでに一般的に存在しているという、新たなパラダイムへのシフトによって導かれるのではないか。

言語機能が進化の過程でどのようにして発生し、人に特有なものとなるに至ったのか、また感情が言語機能と結びついてどのようにして人独自のものへと進化することが可能になったのか。この新しいパラダイムに則り、その過程を明らかにすることが、右半球になぜ、認知と感情の統合の結果としての自己認知のはたらかさがあるのかを理解する鍵となるだろう。特集のテーマの「絵画」と関連させるならば、美意識の発生と進化の問題もこの範疇のものではないだろうか。本年度の神経心理学学会総会のテーマが「脳と認知研究のパラダイムシフト」とあるのも、私のこのような提起と無関係ではないように思える。



Profile — 坂野 登

1957年、京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業。1962年、同大学大学院博士課程単位修了。翌年、文学博士。ライプツヒヒ大学医学部研究助手、京都大学教育学部助教授、教授、ライプツヒヒ大学心理学研究所ブント記念講座客員教授、神戸親和女子大学教授などを歴任。

専門は教育神経心理学。主な著書は、『神経心理学』(編著、新読書社)、『ひとはなぜ指を組むのか』(単著、青木書店)、『こころを育てる脳のしくみ』(単著、青木書店)、『脳と教育』(編著、朝倉書店)、『脳とこころ』(単著、教育心理学年報)など。